

## 明治 12 年長崎博覧会

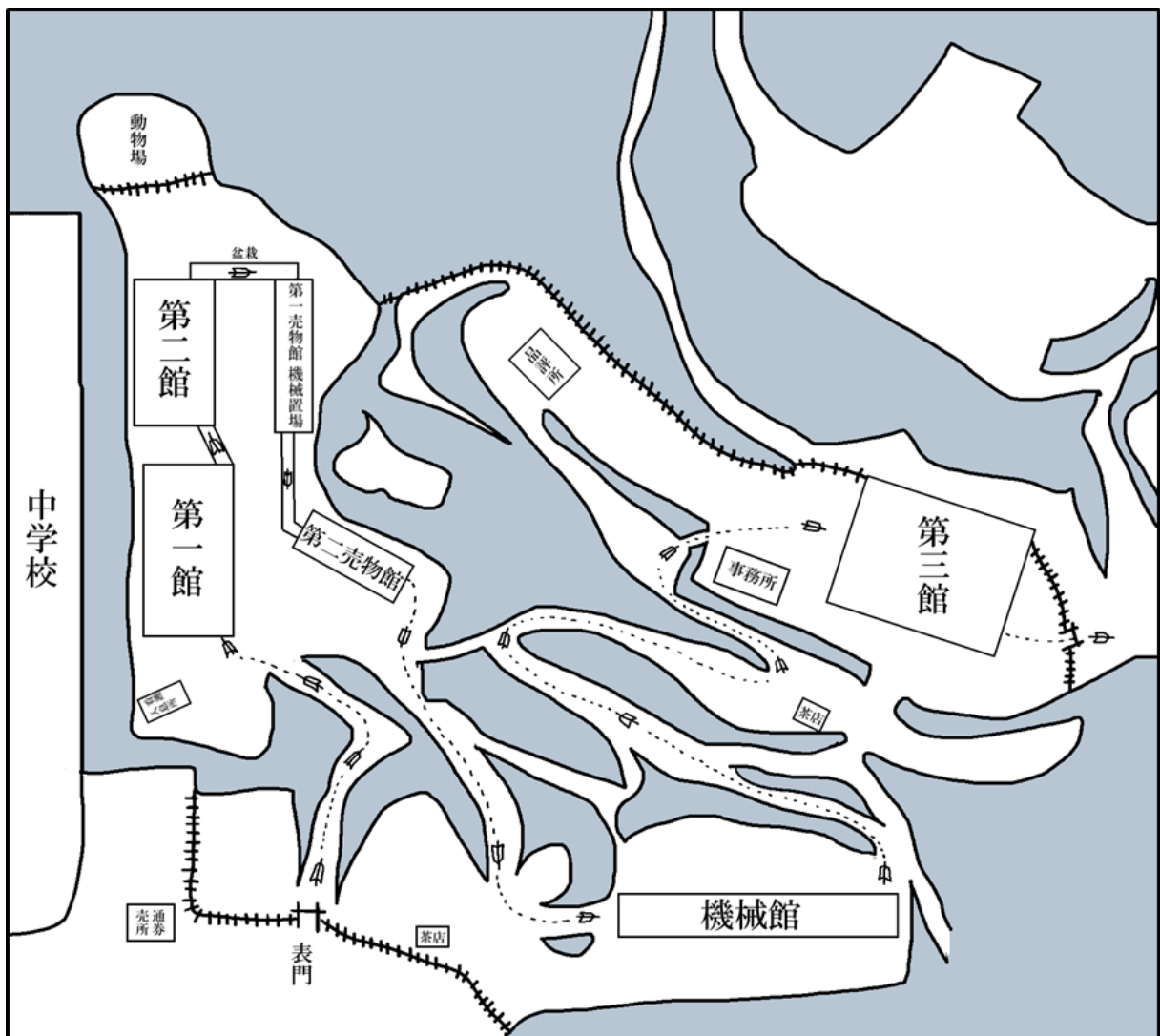
博覧会と聞いて、私たちがイメージするのは、万国博覧会だと思います。明るく華やかに、人類の最先端の知識や技術を展示する魅力的な催事です。

日本の博覧会の歴史は 1867 年、幕府が徳川昭武を代表とする使節団をパリ万国博覧会に派遣したことに始まります。維新後の日本政府もまた博覧会を重視し、万国博覧会に積極的に関与していきました。

さて、このような博覧会ですが、明治初期に国内向けの、かつ地方が主体となって運営した博覧会(地方博覧会)も数多く開催されたことは、万国博覧会ほどに知られていないように思われます。

この地方博覧会、当然長崎でも開催されました。今回は、この長崎博覧会の様子について、当時の会場内の様子を再現し、皆さんと一緒に追体験してみたいと思います。

いざ、時は明治 12(1879)年、所は長崎公園、長崎博覧会へ!



## 1.入場まで

上の図は、「長崎博覧会場独案内」長崎歴史文化博物館収蔵「長崎博覧会報告並規則」(へ17/227)所収を参考に筆者が作成したものです。以降、上の図の導線に従い、会場を見て参りましょう。

長崎博覧会は1879年3月15日に開会しました。当初は1877年に開会の予定でしたが、西南戦争のため延期となりました。開催期間は60日間と予定されていました。しかし、その後観覧者数が想定外に多いことから6月4日まで延長されました。

では、チケットを買いましょう。長崎博覧会の入場料は日曜日が10銭、平日は8銭で、チケットの色(赤と白)が異なっていました。どちらも当時の長崎の人々にとっては高価であり、購入できない者も多かったそうです。これをみた西洋人二人が大量に買って配ったという逸話が、『西海新聞』や『読売新聞』、さらには中国における英字の全国紙 *The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (以下 *NCH* と略)で美談として紹介されました。長崎博覧会は地方博覧会にしては例外的に、国際性豊かな博覧会でした。国際貿易都市・長崎の面目躍如と言ったところでしょう。

さてチケットを買ったら、まずは第1館です。ここからいよいよ展示が始まります。展示物は東京大学附属図書館所蔵の『長崎博覧会列品目録』に全て記載されていますが、ここでは紙幅の都合上、代表的な展示物や展示の構成の特徴などに限定して、当時の新聞等の取材記事を参照しつつご紹介します。

## 2.パビリオンの内容

### (1) 第1館

まず第1館では、主として工芸品が展示されていました。当時の主力輸出品です。香蘭社のカップとソーサーのセットなど、西洋人が利用するものが展示されていたことが分かっています。この時期の日本の陶磁器は、輸出品として優秀であり、この香蘭社からの出品物は長崎博覧会において一等褒賞を得ました。本格的に洋食器の輸出が始まるのは1900年ごろからとなりますが、これはその萌芽と言えるでしょう。更に高島炭も第1館に展示されました。

このような工芸品や高島炭の展示は明らかに外国市場を意識したものです。*NCH*は、長崎博覧会は同地の対外貿易に刺激を与えるものであり、その影響は会期を越えて続くものと信じているとコメントしています。

## (2) 第2館

続いて第2館の展示を見てみましょう。第2館では、展示の様相が一変します。後醍醐天皇の皇子で元弘の乱において活躍した大塔宮の甲冑などの骨董品のほか、秀吉の朱印状といった古文書の類まで展示されていました。

これらの中でも荒木宗太郎に関する遺物、特に宗太郎が旗印としたジャンク船の絵は、安南国王女との逸話（いわゆる「アニオーさん」の逸話）とともに特に外国人の強い関心を惹きました。また絹やサテンなど、当時の代表的な輸入品の一部もこのパビリオンに展示されていました。

## (3) 売物館と機械館

これら第1,2館の展示物は、第1,2売物館で購入可能でした。第1売物館は、機械置き場も兼ねていました。ここには農具や「本木小太郎活版機械」など、動力を必要としない機械類が展示されていました。

動力を必要とする機械は機械館で取り上げられていました。ここでは飽の浦から持ち込まれた旋盤、のこ盤、蒸気船の模型などが展示されていました。

## (4) 第3館

そして本館である第3館では、第2館に続いて再び骨董品が登場します。皇族の遺物も展示されており、ここにはおそらく全展示物の中で特に展示する価値があると長崎県庁が考えたものが集められたのでしょう。

他に第3館のみが有する展示物としては、日露戦争の戦利品があげられます。伊藤真実子(2008)によれば、近代の博覧会は「帝国の支配を正当化する文化装置」としても利用されていましたが、長崎博覧会においてもそうした機能が期待されていたのかも知れません。

また外国人からの出品物が展示されているのも第3館の特徴です。李鴻章からの出品予定もあったそうです。このことは、長崎博覧会に対する当時の清朝官界の関心の高さを示すものと言えます。しかし残念ながら、李の本拠地である天津の港はこのころ凍結しており船を出せず、代わりに上海の官商に出品させることになりました。官以外では、長崎の代表的な華僑である泰益号(この時期は泰昌号)も大硯と玳瑁全甲を出品しています。

このように、長崎博覧会には多くの珍品が展示されましたが、一方で米や麦、醤油、菓

子、煙草、などの身近な品々も展示されていました。これらは当時の新聞記事には紹介されていませんでしたが、『長崎博覧会列品目録』を見る限り決して少なくはありません。こんな牧歌的なところも、地方博覧会の魅力と言えるでしょう。

### 3.長崎博覧会の国際性

以上が長崎博覧会の様子ですが、これを再現するにあたり参照した主たる史料は、前述のとおり当時の新聞記事です。ただし、日本語のものではありません。英字新聞です。

当時の長崎では『西海新聞』という地方紙が発行されており、ここにも長崎博覧会についての記事が多数掲載されていますが、個々の展示物の情報まで含むような記事は少ないです。長崎県内の催事なので、日本人なら実際に見に行けば分かるよ、ということだったのでしょうか？

それはともかく、本コラム「1」の記述は、長崎で発行されていた英字の地方紙 *The Rising Sun & Nagasaki Express* (以下 *R&N* と略) によるところが大きいです。*R&N* には、外国人が長崎博覧会に展示された輸出品や骨董品に大きな興味を抱いている様子が克明に記録されています。

世界と日本をつなぐ町・長崎で開催された地方博覧会は、地方博覧会とは思えないほどに豊かな国際性を有していたのです。

2025年、大阪で再び万博が開催されようとしています。これにあわせて、現在のさまざまな特産品や技術を集めて「今よみがえる!長崎博覧会!!」なんてのも楽しいかも知れませんね。

【長崎県文化振興課 佐野実】

#### 主たる参考文献

吉田光邦編『万国博覧会の研究』(思文閣出版、1986年)

伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』(吉川弘文館、2008年)

國雄行『博覧会と明治の日本』(吉川弘文館、2010年)

日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会 明治一二年の長崎博覧会をめぐって」(中村質編『開国と近代化』吉川弘文館、1997年)

松下久子「近代日本の洋食器生産と輸出について 日本陶器のディナーセット完成前

史」(森谷美保, 谷口俊二, 鶴飼幸代編『ノリタケデザイン 100 年の歴史』朝日新聞社、2007 年)

阿部武司「近代化の発展と伝統的要素」(宮本又郎編『日本経済史』改訂新版、2012 年)

明治 11 年 5 月 3 日付外務省宛長崎県令北島秀朝(外務省外交史料館所蔵「外務省記録」三門一五類一項「長崎ニ於テ人民結社博覧会開設一件」)

*The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette*

*The Rising Sun & Nagasaki Express*

『西海新聞』

『読売新聞』

長崎歴史文化博物館収蔵「長崎博覧会報告並規則」(へ 17/227)

『長崎博覧会列品目録』東京大学総合図書館田中文庫版